2023年4月20日

教育開発支援機構　教育開発・学習支援センター

2022年度教員による授業相互参観実施状況報告書（教育開発・学習支援センターホームページ掲載内容）

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】（実施方法・効果など）	次年度への課題
法学部	【法律学科】全専門科目 【政治学科】専任教員全科目 【国際政治学科】専任教員全科目	【法律学科】3科目 【政治学科】5科目 【国際政治学科】3科目	【法律学科】 今年度は講義科目１つと1年生向けの入門系の演習の2つのクラスの授業参観を行った。 このうち講義科目はオンデマンドで行われているものであったため、授業参観希望教員が担当教員から授業方法についての説明を受けた上でオンデマンド教材を見せてもらう形をとった。教材としては詳細な注のついた5頁にわたる教科書形式のレジュメが配られており、また併せて注に書かれた参考資料も配布され、学生は2～3回に一度レポートを課されているとのことであった。レジュメの内容はわかりやすく資料が詳細でオンデマンドでも勉強がしやすい工夫がされており、教材配信型の授業をする際の参考になったとのことであった。 　入門系演習の2つのクラスでは、いずれも学生のプレゼンテーションが行われているのを参観した。一方のクラスでは、判例について事案の内容をしっかり理解し説明することに焦点が当てられていた。1年生前期の授業では判例を扱っても学生が判決内容を理解するのは難しい面があるが、事案の概要のみに絞れば、学生には理解しやすいとともに判例に慣れることができ、プレゼンの練習方法として参考になったとのことであった。 もう一つのクラスでは、学生が3人1組で事例問題のプレゼンを行っているのを参観した。3人が司会・説明・他の学生への質問担当に分かれ、大変よくまとまった説明を行っており、また聞いている学生からも活発な質問があり、3・4年で行うゼミレベルの内容であったとのことであった。授業後、担当教員に参観者が聞いたところ、プレゼンまでにグループに分かれてかなり準備をする時間を授業の中で設けているとのことで、上級学年での勉強に向けての入門的な演習として理想的に機能していると思われたとの参観者からの報告があった。 【政治学科】 　政治学科では、必修科目「政治学入門Ⅰ・Ⅱ」の講義動画・資料を他の教員も閲覧・ 参照できるようにしている。これにより、学習課題についての知見、考察・分析手法、教授法を相互に知ることができている。 また、複数の教員によって担当される「現代政策学特講」においても授業内容の相互参観および意見交換が行われた。また、１年生向けの「政治学入門演習」（8クラス開講）においても、「政治学入門Ⅰ・Ⅱ」と緊密に連携し、その講義内容を相互に参照する機会を設けている。それに加えて、「政治学入門演習」の担当教員間で全クラスの学習成果を共有した。このことにより、特に少人数教育の教授法の理解が深まった。 【国際政治学科】 　国際政治学科の必修科目である「国際政治への案内」においては、本年度も複数の教員で担当し、各教員の専門分野を紹介し、国際政治学を鳥瞰できるような講義を展開した。工夫が施されたレジュメとスライドを教員間で共有し、互いに講義の内容を把握できるよう努力した。 「国際政治ワークショップ」に関しては、事前に入念に担当教員で準備を行い、学生のプレゼンテーションが円滑に行えるような工夫を練り、本番に備えた。教員の講義内容に関しては、互いに詳細を把握できるようコミュニケーションを充実させた。また、今年度は講義の最後にオンラインをメインとした懇親会を開催し、学生と教員の交流を深めた。 「戦後国際関係史」に関しては、上記の「国際政治ワークショップ」と同じく今年度が誕生2年目の若い科目ということもあり、担当教員で事前に入念に内容を話し合い、配布するレジュメを共有し、レポートも単一の課題を出すことにしたため、濃密な話し合いを行った。最終回では昨年度と同じく、担当教員一同が教室に集合し、「シンポジウム形式」で各々の専門分野の立場から歴史や現状について論じた。	【法律学科】 授業参観の対象科目といっても、オンデマンド授業の場合には、参観者がHoppiiに直接入れるわけではないので、担当教員に授業内容の説明をお願いしたり、資料を送ってもらったりせざるを得ないという問題がある。オンデマンド型授業の参観をどのように実施するかは今後考えてゆく必要があるように思われる。 【政治学科】 特になし。 【国際政治学科】 　「国際政治への案内」については、来年度について担当教員で活発な議論を行い、より充実した講義とすべく、評価をレポートから試験に変更することにした。またより出席状況を把握できるような施策を検討し、次年度に向けての課題を話し合った。 　「国際政治ワークショップ」については、いよいよ対面型での実施に向けてさらなる講義・演習の充実を目指す。 　「戦後国際関係史」については、複数の教員で担当することから、各自のコマ数が限定されている。その少ない回数のなかで、いかに濃密な歴史の講義を行うか、課題としたい。

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】（実施方法・効果など）	次年度への課題
文学部	97科目	7科目	例年どおり、5月に公開科目を一覧表にして、専任教員に配布した。今年度は春学期・秋学期ともに実施した。 授業相互参観が実施されたのは、学部全体で7科目であった。今年度の授業は対面形式を基本としたが、参観の方法は対面とオンラインの双方があった。今年度も活発な授業相互参観が行われ、授業（ハイフレックス形式を含む）の進め方や教材の活用法等について、教員間で積極的な情報共有がなされた。また、各学科でFDミーティングが開催され、学生の学習状況についての情報共有や、授業の実施方法等に関する意見交換が例年どおり積極的に行われた。	【哲学科】 ・引き続きカリキュラム改革を滞りなく進められるよう必要な検討を行っていく。 【日本文学科】 ・対面授業に戻ったことによって、実際に教室へ足を運ぶことが少々負担に感じるようになってしまった事は否めない。対面授業下においてどのように参観を促すか、その方策を考える必要がある。 【英文】 ・引き続きFDミーティングを開催し、効果的な授業実施方法についての意見交換および教育内容の検討を行ない、必要な改革や改善を実施する。 【史学科】 ・今後も会議の場で、授業や学生の情報について共有を図り、学科として対応していくことを確認した。 【地理学科】 ・FDミーティングは定期的に行われ、授業相互参観科目数も増やしているが、授業相互参観の実施科目数は増えていない。今後は実施科目と参加者数を増やすことができるように学科で努めたい。 【心理学科】 ・特になし 【共通科目】 ・オンライン形式に伴う予想外の問題、例えばzoomにうまく入室できなかったり、動画配信の際に動画が止まったりするなどに対して迅速かつ適切に対応できるように、本年度に起きた問題点をしっかり総括し、来年度の授業改善を図っていきたい。 ・講義する場所がなく、出校を希望する講師に対する配慮が必要で、事前に講義する場所とネット環境を整える必要がある。 ・25分以内400字以上のレポート課題について、zoom接続問題や入力操作の不慣れが原因に提出できなかったケースが見られ、提出時間を検討する必要がある。 ・各回の授業運営をスムースに行うために、出欠確認の方法、成績評価方法、授業のやり方について初回の授業ガイダンスの際により細かく学生に周知を徹底する必要がある。
経済学部	67科目	8科目	（1）実施方法 ①公開方法 経済学部専任教員は各担当科目のうち原則として1科目は授業相互参観科目とする。 ②参観方法 経済学部所属教員は、所定の期間内にあらかじめ参観申込をしたうえで授業参観することとする。 ③公開期間 2022年6月13日（月）～6月17日（金） （2）授業実施者へのフィードバック等 参観申込み者には、執行部まで①授業担当者に対する感想、②授業相互参観制度に関する意見・感想の提出を依頼した。①授業担当者に対する感想については、授業担当者本人にフィードバックを行った。	（1）公開科目数に対して実施科目数が少なかったため、実施時期直前の周知を工夫し、実施期間の延長等を検討し、実施科目数を増やし、経済学部の教育力の向上を図ることが今後の課題である。 （2）オンライン・対面の効果について、何らかの効果測定が可能であれば有益と考えるが、工夫まではまだ思いつかないために、次年度以降の課題として引き継ぎたい。 （3）兼任講師を含めた授業参観の対応については、今後、検討していきたい。
社会学部	全開講科目	36科目	①オムニバス型の授業での実施（2科目） 　教員間で、授業の方法や内容に関する打合せを行っている。参加した教員にとって、今後の授業運営の参考となっている。 ②本学部ゲスト講師制度を利用した外部講師を招いての授業をとおした実施（34科目） オンライン上で外部講師を招聘し、その授業を参観するだけでなく、外部講師との意見交換を行った。授業方法や内容に関して、刺激を受けることができた。 ③専任教員担当の授業に別の専任教員をゲスト講師として招く形での実施（2科目※②と重複） 　ゲストとなる専任教員に別のテーマで話をしてもらい、担当教員とゲスト教員と学生たちとで議論を交わした。	業相互参観を含めた教員間の交流を通して、授業の方法・内容のさらなる改善を図ることを促す。 今年度は対面授業が増加し、ゲスト講師制度の利用が昨年度より増加している。オンライン上でもゲスト講師を招聘出来る事が浸透してきたため、今後も授業内容の充実化や活発な議論の機会を増やす機会にしたい。

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
経営学部	専任・兼担・兼任教員の全科目(演習等の小規模授業は除く)。	16科目	(1) 実施方法・時期等 公開対象は、原則として専任・兼担・兼任教員による講義授業とした(演習等の小規模授業は除く)。参観は昨年と同様、2022年5月～10月の授業を対象とした。また、参観者は、参観を希望する授業日の 1 週間前までに e mail 等で担当教員に直接申し入れる事前申込制とした。 (2)効果等 参観者は、執行部および授業担当者に対して授業内容の感想や改善点について、所定のフォーマットを用いてフィードバックを行った。主に参観者の側から、自らの授業に活かせる学びが得られたというポジティブな反応が多く得られた。	・実施科目数が昨年の9件から16件に増加したことは良かったが、まだ参観数が少ないため、次年度は事前周知を徹底することで実施件数を増やしたい。 ・特に、専門の異なる分野の授業を参観することで、異なる視点から授業運営等に関する学びが得られる点など、今年度の参観者から得られたポジティブな反応を紹介することで、相互授業参観のメリットをより積極的に周知していきたい。
国際文化学部	25科目	6科目	FD委員が主体となり、相互参観可能科目を専任教員に対して募り、教授会メンバーに対し参観可能科目一覧を共有し、実施した。授業参観実施後、「授業提供者」「授業参観者」「どちらにも不参加」のそれぞれの立場に関するアンケートを行い、授業相互参観及びFDに対する意見を収集した。実際に参観した教員からは、「自らの授業運営に取り入れていくべききわめて有意な気づきがあったこと」「授業にすぐに生かせそうなヒントを得られた」といった授業相互参観の有意性を示す意見が得られた。	・授業相互参観に不参加になった理由の中には、授業参観を希望していたものの日程(時間割)が合わなかったこと、様々な業務による多忙等の理由により時間が取れなかったことなどが挙げられていたことから、より長い期間を設け、オンライン授業の周知を徹底するなど、時間の都合をつけやすくする必要がある。 ・参観率をあげるために、より参観機関の拡大と積極的な周知が必要であり、また対面方式で実施する際には、受け入れ可能リストに記載する項目の充実化(曜日時限だけでなく教室番号を記載するなど)を図る必要がある。
人間環境学部	全科目	9科目	1.「人間環境学への招待」 この1年生の春学期に開講されている全員必修授業では、毎回それぞれ2名程度の教員が各自の専門性を踏まえた講義を行っている(今年度は専任教員のほぼ全員が登壇した)。この授業は、コーディネーター(4名)にとっても、各回登壇者にとっても、相互の授業の手法や研究アプローチを知ることができる貴重な機会となっている。 2. フィールドスタディ SCOPE科目であるField Workshopを含め11コースを実施し、そのうち7コースで複数教員が企画・運営にあたった。事前・事後授業や現地訪問において、専門がちがう教員がお互いに啓発し、刺激し会う格好の機会となっている。 3. ゼミへのゲスト参加 1名の教員が他のゼミに出席し、コメント・講評を行った。学生にとっても、ゼミ指導教員とは異なる専門分野の研究者との交流は通常望んでもなかなか得られるものではなく、刺激的な経験であった。	上記3つの試みのうち、1. 2. はカリキュラムの中に組み込まれているが、3. は教員の自発的なイニシアティブに基づくものである。こうした部分的な試みを学部全体に拡げていくことが今後の課題である。 　同様に教員の自発的な努力に委ねられているため、今年度はゼミの合同開催は行われなかった。この試みは、学生たちから好評を博しているとともに、参加教員にとっても視点を相対化し視野を拡大することができる機会である。こうした単なる「参観」の枠を越えた各種の教員同士の研究交流・合同授業の場を今後も用意していきたい。
現代福祉学部	本学部専任教員の担当科目(ただし、演習・実習科目、情報・調査系科目、言語コミュニケーション科目、その他、担当教員が公開を希望しない科目を除く)	5科目	＜実施方法＞今年度は対面での授業を基本とし、教育的効果を期待できる場合に限ってオンライン活用を行うこととした。そのため、今年度実施した授業相互参観は全て対面授業となった。公開期間は、春学期: 6/27(月)～7/9(土)の2週間、および秋学期:11月～1月の約2月間とした。 ＜得られた効果＞ 対面授業では、「最近起きた事件(安倍元総理銃撃事件)や社会状況(新型コロナウイルス感染状況)などを話題に出して、臨床心理学との結びつきを示し、授業への導入を行っていた。ツーリズム資源としての水を理解する文脈で、江戸時代に出された京都の名水番付を素材に、その序列が現在のような水質とは異なる観点で評価されている点に着目し、資源を捉える視点の多様性や時代の変化に関心を惹きつける工夫をされていた。」など、身近な観点や興味を引きつける話題から各専門領域への学びの導入がなされていたことが評価されていた。 また、外部講師を招聘する講義として、オムニバス形式や隔週でのゲスト講師を招く方法などが実際された。これらの授業は「受講生からゲストへの質問は前週にリアクションペーパーを通じて集約し、ゲスト講師による授業のリアクションペーパーはゲスト講師に共有、ゲストからのフィードバックは次回の授業で共有する方法がとられていた。これにより、受講生の質問や疑問についても十分なフォローがなされ、理解度向上に効果があると感じられた。 受講生の感想やコメントをテーマや項目ごとに整理し、それを事前配布し、当日のディスカッションの活性化につなげる工夫がみられた。オムニバス形式の授業では、前回の授業への感想を取り上げ、それに答える形で、今回の授業との関連を示し、各担当教員のテーマの連続性や関連性について工夫がなされていた。」等のゲスト講師と学生をよりよくつなぐ方法が工夫・実践されていたとの評価を得た。 さらに「受講者多数の授業でありながら、学生に呼びかけたり、発言を促すなど随所に参加型授業への工夫が感じられた。関心のある社会課題と解決策について小さなグループを複数つくり、相互の理解を深める方法がとられていた」など、学生自身の主体的な授業参加を促したり、「地図や写真を活用して具体的なまちづくりを理解することができるようにしたり、パワーポイントの文字が大きく、色合いも鮮明で見やすく作成されていた。穏やかかつ明確な語り口で、講義が聞き取りやすかった」など、講義の理解が深められるような工夫についても好評価が得られた。	次年度も対面実施を基本としつつ、教育的効果を期待出来る場合にはオンラインを活用する方針であるため、引き続き、対面とオンラインそれぞれの形態についての利点や課題が明らかになるように、オンライン授業の相互参観も行い、教育方法や授業内容の質を高める議論を続けていきたい。

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】（実施方法・効果など）	次年度への課題
情報科学部	全科目	7科目以上(16回以上)	2022年度にカリキュラム改変を行い、それに関連した授業参観を中心に実施した。特に、プログラミング入門はクォータ化し、夏季に補習科目を設置した。これに伴い、クォータ末試験の平均成績の高かった授業の参観を行い情報共有したり、夏季の補習科目を参観して、学生の理解度を確認したりして、授業実施方法の改善を試みた。	引き続き、カリキュラム改変に関わる科目を中心に、授業参観を行う。この他では、複数教員による共同実施科目について、情報共有のための授業参観を推奨する。
キャリアデザイン学部	基礎ゼミ1、基幹科目のうち「入門」のつく科目14、「キャリア研究調査法」（質的調査）（量的調査）2、体験型必修科目14、学部専任教員が担当する科目のうち6、計 36科目（複数開講科目をカウントした延べ数85科目）	36科目（85科目）	1）年3回のFDミーティング 4月、9月、2月の3回、FDミーティングを実施している。基礎ゼミ、基幹科目のうち「入門」のつく科目、「キャリア研究調査法」（質的調査）（量的調査）、体験型必修科目については、FDミーティングまでに担当者間で授業内の取組や課題を共有し、改善等の話しあいを行っている。とくに複数開講科目については担当者間でシラバスの内容を確認し、授業の進め方や学生の態度、修得状況、コロナ禍における課題等について共有することで、抜けのない、よりよい授業実践につなげることができている。FDミーティングでは学部に対してこれらの報告を行い、学部教職員全員で共有することで、各自の授業改善に役立てている。また、基礎ゼミや入門科目について状況を共有することは、その上に積み重なる学部専門科目の担当者にとって、学習状況の確認にもなり、有益である。 2）相互授業参観 　コロナ禍で取りやめていた学部教職員間の相互授業参観を秋学期から再開した。専任教員の担当科目について、指定された公開日に教員が参観する形で実施した。オンライン、対面の両方を含む。 　オンライン授業について、大量の資料を用いた授業のやり方、学生が復習できるような配布資料の作成の仕方、課題の出し方について発見ができたという参観者の感想があった。また、対面よりも授業の密度が濃くなるため、途中で休憩をはさむ、フィードバックに長めの時間をとって理解度を高めるといった工夫の共有がなされた。 オンデマンド動画について、授業担当者の顔を出したほうが、表情が見え、学生から評価が高く、授業内容に対しても理解が高まるという感想があった。	次年度も引き続きFDミーティングと、直接の授業相互参観とを併用する。
デザイン工学部	建築学科 17科目 都市環境デザイン工学科 15科目学科主催の全学科 （他学科学生との混成クラスを除く） システムデザイン学科 5科目	建築学科 17科目 都市環境デザイン工学科 15科目 システムデザイン学科 5科目	・建築学科 建築学科においては、1年次から4年次に至る全てのデザインスタジオ科目をはじめ、フィールドワーク、ビルディングワークショップ、卒業研究、卒業制作において、全クラス合同の講評会を行い、兼任を含む教員が相互に他の科目やクラスの内容について理解し、議論できるようにしている。さらに、公開講評会を適宜開催して学内外に対して学習成果を公開し、外部意見・外部評価を受ける機会を設けている。またスタジオ科目、フィールドワークおよび卒業制作の優秀作品と卒業研究の梗概をそれぞれ学科発行誌「法政大学スタジオワークス」、「建築研究」に掲載することで達成状況を共有している。 ・都市環境デザイン工学科 毎年授業のビデオ撮影を実施している. 今年度は遠隔で行われたZoom映像記録のアドレスや授業の録画映像を学科共有のディレクトリにアップロードし、当該教員および他の教員も視聴できるようにした。 ・システムデザイン学科 PBLを基本とした必修授業を中心に、全専任教員(外国人客員教員を含む)が参加して相互参観を実施しながら学生の指導にもあたった。学生は課題を調査し、その解決方法を企画立案し、企画・中間発表・試作・成果発表の各段階で全教員からのフィードバックを受け、学生と全教員が参加して講評を行う機会を設けた。今年度はすべて対面で実施し、学生の評価物に対して講評することで意見交換を行い、相互チェックした。授業中は、学生のプレゼンテーションとパネル展示を行い、実際の作品の動作を確認しながら、全教員間で情報共有して、コミュニケーションを図ることができた。このような相互参観の機会を含めた共同指導体制をとることにより、学生の授業や課題の進捗状況を全教員が把握し、学生からの作品制作にかかわる質問などを共有し、適切にアドバイスや指導を行うことができた。	演習科目において、学年および学科横断的に参加可能な講評会を実施した。 来年度以降は開催日程や告知方法など詳細な事前調整を行い、より活発な学科間交流と意見交換を促 したい。

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
理工学部	549.17科目	25科目	1.実施時期　主に2022年度秋学期 2.実施方法　以下の2通りを実施した。 a)個別授業相互参観 ・コロナ禍ということで、オンライン実施の授業も対象とし柔軟に実施した。 ・専任教員は、全ての担当科目を原則として、期間内授業相互参観可能な科目とする。 ・専任教員は、担当教員に連絡の上、所定期間内は自由に授業参観をすることができる。ただし、授業運営の支障とならないように、特に配慮する。 ・相互参観希望者は、科目担当教員と事前に、科目、曜日、希望参観時間(15分～90分　任意)を調整し、教室内等で参観する。 ・参観した専任教員は、参観報告書(委員会提出用及び担当教員提出用)を記入し、各学科担当委員及び科目担当教員に、個別に提出する。 b)学科に特化した柔軟な運用による公開(学科別) 1. ・学科別にa)とは別の形式で、学科独自の柔軟な運用を含む授業相互参観について検討・実施する(例　PBL、実験・演習、複数教員担当形式授業、研究室配属説明会、卒業・修士論文中間発表会を用いたプレゼンテーション能力の検討等)。	・授業相互参観の実施率の向上及び個別の授業参観報告書のフィードバック方法の検討 ・客観的な授業改善に関するチェックを簡易的に行えるシステムの検討(報告書含む) ・兼任講師を含めた、全授業における授業相互参観を継続 ・参観授業数を増やすこと
生命科学部	春学期　93 秋学期　90	春学期 14(参観回数15) 秋学期 15(参観回数16)	生命科学部では、今年度、春学期(6月6日～7月2日)と秋学期(11月7日～12月3日)の2回、授業公開を実施した。今年度も例年と同程度の科目数の授業が公開された(2020年度:142科目、2021年度:184科目、2022年度:183科目)。今年度の参観回数は昨年度と比べ、春学期・秋学期合わせて2件増加した。授業参観者アンケートの自由コメント欄では、それぞれの授業で行っている工夫が参考になったという意見が多く見られた。	参観回数が昨年度と比べ増加したが、まだコロナ禍以前のレベルには戻っていないため、来年度も継続して参加を促す必要がある。 来年度に向けて、これまで参加していなかった教員にも参加してもらう新たな方策が必要である。
グローバル教養学部	春学期7科目、秋学期実施せず	春学期7科目、秋学期実施せず	春学期ともに新規採用の専任・兼任教員の科目を中心に授業参観を行った。ほとんどが対面での授業であったが、一部ライブ型オンラインの授業もあった。参観した専任教員はFDワークショップ(7/20開催)にて書面と口頭で各授業の工夫や苦労している点などを報告し、全専任教員で共有をした。授業担当教員に対しては、授業参観を行った教員が口頭または書面でフィードバックを行い、アドバイスをした。専任教員と兼任教員が授業実施について意見交換する貴重な機会となった。	専任教員が新任教員の授業を参観するというパターンが定着しつつあるが、長年教鞭をとっている専任教員の授業も参観したいという声があったため、次年度は授業を公開しても良いという教員を専任の中から募り、専任教員同士の参観を促す。「学生が選ぶベストティーチャー賞」を受講した教員の授業や、各教員のゼミなどが候補にあがっている。
スポーツ健康学部	全科目	11科目	・授業相互参観は、主に対面授業において実施された。 ・中学校での授業実践事例を参観し、生徒にもわかる授業を大学の授業においても工夫して実践する必要があることを実感したとの意見がでた。 ・講義終了近い段階で小テストを実施し、コメントを付けて総括、また頻繁な質問の投げかけなど、生き生きとした授業展開がなされていた事例が報告された。	・実技科目については、学部棟とグランドや体育棟とが離れているため、移動などの物理的な問題もあり、相互授業参観の実施が容易でない点は課題である。 ・引き続き授業相互参観に努め、質の向上を継続的に図ることとする。

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】（実施方法・効果など）	次年度への課題
市ケ谷リベラルアーツセンター	全科目	18科目	実施された14科目の実施方法は、以下の通りであった。 ①授業相互参観（従来型）：4科目 ②授業参観による研修（新任教員対象型）：6科目 ③セルフ授業参観（録画記録によるセルフレビュー型）：4科目 ④教員相互授業情報交換会：3分科会（4件） 昨年度はほとんどがオンライン授業を対象としていたが、今年度は約7割が対面形態の授業を参観するものであった。 ① 授業相互参観（従来型） 「英語3」、「English1Ⅱ」、「朝鮮語6」、「スポーツ総合演習」で実施され、「英語3」では知識の定着や学びを促す方法を評価しており、「English1Ⅱ」では学習を定着させる工夫、自宅での復習の成果を評価することにより学習意欲を高める効果が評価されていた。「朝鮮語6」では、宿題の正誤の確認から始まり、今日的な言語使用の実態に鑑みた指導が評価されていた。「スポーツ総合演習」では、注意事項の徹底やウォームアップによる安全管理がなされ、コミュニケーションを促す工夫が評価されていた。 ② 授業参観による研修（新任教員対象型） 「English1Ⅱ」、「ドイツ語（3）Ⅱ」、「ドイツ語１Ⅱ」において、各2科目ずつ実施され、「English1Ⅱ」では授業の導入方法の工夫や授業中のアクティヴィティー、提出物の返却作業時間の短縮など、効果的な方法が評価されていた。「ドイツ語」では、副教材を利用した立体的授業構成や学習のモチベーションを高める工夫が評価されていた。 ③ セルフ授業参観 ビデオ録画記録によるセルフレビューが、「情報処理演習Ⅱ」において2科目、「法学Ⅰ」、「法学Ⅱ」で実施され、「情報処理演習Ⅱ」ではTAとの連携を密にし、協力体制を築くなどの改善余地のあることがいずれにおいても指摘されていた。「法学Ⅰ」および「法学Ⅱ」ではホワイトボードへの板書と音声がズレに着目し、その改善案について言及されていた。 ④ 教員相互授業情報交換会 「自然科学分科会」、「英語分科会」、「諸語分科会（ドイツ語）」、「諸語分科会（中国語）」で実施され、いずれもZOOMが利用されていた。参加者は「自然科学分科会（5名）」、「英語分科会（40名）」、「ドイツ語（12名）」、「中国語（35名）」であった。22年度の履修者動向やクラス編成等の意見交換や、成績入力の厳守、個人情報の保護、ダイバーシティへの配慮等の注意喚起、オンライン授業の工夫と効果的な取り組み等の経験談などの情報交換がなされていた。また、「英語分科会」では、小グループの懇談会を実施し兼任講師への細やかな対応が行われていた。	1）授業参観回数は昨年度よりも増加したが、来年度も継続して参観を促す必要がある。 2）分科会相互の情報交換を促す目的で、授業参観時の客観的なチェックを簡易的に行えるシステムを検討する。 3）2022年度第8回ILAC運営委員会で決定した「教育効果を鑑みたオンライン対象授業（8科目）」の教育効果を検証する方法として授業相互参観の提案し、関連分科会に協力を依頼する。
小金井リベラルアーツセンター	原則として全科目（ただし担当教員が公開を希望しない科目を除く）	7科目	今年度も従来同様、参観期間は限定せず、春学期・秋学期授業実施期間のいつでも、関係教員の関心と都合に応じて参観が実施できるようにした。参観の可否や日時などは分科会単位で事前調整し、参観は対面もしくはオンラインにて行った。 参観した教員は、指定の報告書を記入し各分科会単位でとりまとめ、運営委員会で情報共有を行った。今年度は報告書の書式を改訂し、分科会の垣根をまたいだ参観を行いやすいようにした。	授業相互参観を通じて得た知見を、参観した教員・参観を受けた教員以外の教員とも共有し、授業実施にいっそう生かしていけるようにしたい。
SSI（スポーツ・サイエンス・インスティテュート）	3科目	2科目	（1）実施方法 SSI主催科目を担当する専任教員に対し，授業相互参観に提供可能な科目を問い合わせた。そこで挙げられた科目について，SSI運営委員長と副委員長で手分けし，2022年11―12月の期間に参観を行った。 （2）授業実施者へのフィードバックなど 各参観者で以下の効果に示す感想をまとめた。その内容を授業実施者へフィードバックし，よりよい授業展開に向けた懇談を行った。その後，実施内容を執行部内で共有した。 （3）効果 同じスポーツ科学を取り扱う科目でも，多様な授業展開方法があることを知れたことが最も有意義な点であった。例えば，参観した授業では，用語の具体的な定義を授業冒頭に敢えて説明せず，イメージしやすいスポーツや日常生活の場面から入り，少しずつ踏み込んだトピックに触れることで具体化し，理解を深めさせていくような形式を用いていた。 また，今日では学生の主体的な学びが求められており，それに資するヒントも得られた。授業時間の中盤辺りにグループディスカッションを設けるなどがその典型である。一方，それだけでは学生同士が各グループで意見を共有するに留まってしまう。そこで，インタラクションアプリを活用し，匿名性を保持したまま寄せられた意見を共有したり，授業の最後に簡単なWebテストを実施したりするなど，一定のハードルを課しながらも，学習意欲を内発的に喚起できるような授業環境を整備する重要性も再確認することができた。	（1）実施科目が少なかった。そもそも，本制度の趣旨や意義を委員に十分理解してもらっていない可能性があり，まずはSSI運営委員会で周知を図る。 （2）実施期間の延長等を検討して，実施科目数を増やすとともに，実施科目から得たティップスをいかにSSI科目に活かすのかという点も検討が必要である。 （3）今後は，兼任講師を含めた授業参観も検討していきたい。